



北海道遺産・北見市指定文化財

ピアソン記念館

第114号
(隔月刊)

ピアソン便り

発行：2024. 01.31

(令和6年01月31日)

発行人：中山 一夫 (理事長) 編集人：伊藤 悟 (副理事長)

NPO 法人ピアソン会事務局

(事務局長 伊藤 悟)

〒090-0036

北見市幸町7丁目4番28号

TEL.FAX 0157-31-1215

ピアソン記念館内

午前9:30～午後4:30

e-mail アドレス

pierson@yacht.ocn.ne.jp

姉妹都市

「高知市訪問団、視察見学」来館！

年明け1月10日(水)に、姉妹都市高知市から23名の訪問団が来館。目的は、今年で16回目を迎えた「高知県の観光と物産展」(10日～15日)於まちきた大通りビル)開催に合わせての訪問でした。

高知市と北見市は、1986(昭和61)年に姉妹都市を提携。その源は、1897(明治30)年に、この地に土佐の高知から、北光社移民団(社長坂本直寛)112戸が入植したことによります。

この移民団は、キリスト教徒指導者による『北に光を!』という自由民権的思想をもとにした移民団でした。

代表の坂本直寛は坂本龍馬の甥にあたり、坂本家を継いだ人物で、1885(明治18)年に、高知教会で片岡健吉らと共にG・W・ノックス師より洗礼を受けています。

坂本直寛は、移民団引率後、道央の浦臼に転居しますが、その頃から北海道で活動していたピアソン夫妻との親交が始りその写真(1899年札幌にて)が残されています。1901(明治34)年以降はピアソン夫妻と旭川で活動を共にし、監獄伝道、廃娼運動、アイヌの方々への人道支援活動など、旭川から札幌へ移り、1911

(明治44)年に胃ガンで召天するまで、共に活動を続けていました。

ピアソン夫妻は、坂本直寛の死後、アメリカへ一時帰国しますが、再来日で、日本における最後の活動地と予定していた遠軽を、急遽野付牛(現北見市)に変更するのです。

これは、坂本直寛の「北光社移民団の精神的な支えとなつてほしい」との願いを叶えての変更であったと考えられます。

ピアソンと直寛の
不思議な縁

直寛とピアソンの二人の深い友情を、不思議な縁によつても強く感じられます。

一つには、ピアソン師を日本へ招聘した、G・W・ノックス師の関係です。ノックス師は、二人にとって人生の大きな節目に関わっているのです。

もう一つは、ピアソンが日本に着任したのは1888(明治21)



【写真説明】訪問団構成は、市議会関係者、商工会議所、観光団体、高知市職員など。坂本直寛とピアソン夫妻の関係や、高知(北光社)移民団とピアソン邸の関わりなど、開拓に関する質問が多くありました。

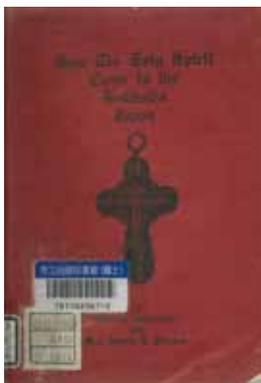
年9月、到着するやすぐ腸チフスにかかりひと月あまり生死をさまようことになりました。

その頃直寛は、「保安条例」違反により、東京石川島監獄に収容されて、その獄内で聖書により平安と北海道開拓の希望を与えられるのです。ここでも二人は、『救いの問題を真剣に考えさせられる契機を得た』と言えるのではないのでしょうか。

二人の貴重な作品

ピアソン師は、多くの著作を遺していますが、共著としての作品は、直寛との作品を除いて妻のアイダとのものしかありません。

左の写真の本は、市立函館図書館に保存されている翻訳名「北海道における精霊の活動」という作品で、大ききB6版で本文百十六ページ、英語による著作物です。表紙写真下の英語書きにもあるように、1907（明治40）年の出版です。



【写真】市立函館図書館所蔵（ピアソン会員宮腰博子さん提供による）

HOW THE HOLY SPIRIT CAME TO THE HOKKAIDO JAPAN
Rev N Sakamoto & Mrs. George Pierson (1907)

【写真右】トラクト「夜明」の表紙。英語名は「THE DAWN」とある。前半に、G.P.ピアソンによる「聖書研究」創世記第一章～第三章。後半に、「霊の想念」として札幌 坂本直寛の説教がある。すでに札幌へ移転していた？



次の作品は、1909（明治42）年10月に発行されたトラクト（小冊子）です。全16ページで大ききはA6版。
表紙に第巻とあることから、継続的に出版する予定で発行されたと思うのですが、第貳、第参、は残されていませんので、この号で終わったのだと思います。この年の11月に、直寛は旭川教会牧師を辞任し札幌へ転居します。この本の表紙には、坂本直寛の名前に「**札幌**」と記載されていますので、広い地域を意識したトラクトとして出版したとの意図を感じます。（伊藤/記）

「アイダ・G・ピアソン 北海道から九州まで」

1918（大正7）の1月から3月にかけて、ピアソン夫妻は、伝道局の視察官として全国の長老派・改革派教会を視察。その記録が「The Japan Evangelist」掲載。その中から高知に関係する箇所を抜粋して掲載します。

神戸からの夜の船旅で、長崎港よりいっそう魅力的な高知の優美な港に着きました。23年間活動してきた北海道では、移住者のうち、最も古くからの、最も忠実である長老派教会信徒の多くは偉大な高知教会出身ですし、また8年間居住した旭川では、盟友の坂本「直寛」牧師とともに活動していたこともあり、高知を訪れることは、長年抱いていた夢でした。高知に関して、じつに偉大な方々の名が思い出されます。片岡健吉（衆議院の議長を4回務めた人。彼のささやかな自宅を見学し、高知城の公園で彼の実物大のブロンズ像を見ました。）、板垣（退助）伯爵、坂本直寛（この三人はみな偉大な自由民権運動の指導者たちで勇敢にも投獄を経験している。田川大吉郎は現在も入獄している。）、武市安哉（北海道に初の高知の入植地を築いた人。現在は3人のたくましい娘を持つ母親代わりでもある。）

そして忘れてはいけないのは、30年前に初めてこの地を訪れた宣教師、フルベッキ博士 Dr. Verbeck、ノックス博士 Dr. Knox、タムソン博士 Dr. Thompson によ。私たちが目にした、高知の立派で古い教会堂は、日本基督教会の中でも2番目に大きな建物ですが、残念なことに、この教会をすみずみまで満たしているのは決して大きな集団ではありませんので、Miss Dowd の歴史ある聖書講釈クラスは、25年前に高知教会の女性たち向けに創世記から始まり、それが今はその同じ女性たちが白髪交じりの「おばさん」となり、40名ほどの「年寄り組」となってエレミア書まで進んでいます。私たちが感じ取ったのは、この土地柄が陽気で進取の気性に富むことで、「高知デパートメントストア」にはテニスラケットが陳列してあったり、自動車や路面電車が、飼い主を人力車に乗せてひいている闘犬用の土佐犬を追い立てて走っています。（略）

※ Pierson Booklet 第9号「ピアソン夫妻 伝道旅行日誌」北原俊之/訳より引用

【参考資料】ジョージ・ウィリアム・ノックス（George William Knox、1853年8月11日 - 1912年4月25日）は、米国長老教会から派遣された、明治時代のアメリカ人來日宣教師である。ナックスとも表記されることもある。

ノックス（Rev. George William Knox, 1853-1912）は、父と同じ牧師を目指して、オーバン神学校に入学。1877年春に神学校を卒業して、アン・キャロライン・ホームズと結婚、ニューヨーク州エルミラの第一長老教会で日本派遣宣教師の任命を受けた。1877年11月2日に夫婦で横浜に上陸。1886年（明治19年）から東京大学に招かれて、アーネスト・フェノロサの後任として、哲学と審美学の講義を行う。

1887年（明治20年）9月に明治学院が開校され、そのこともあり、一時アメリカに帰国し、明治学院のための神学者としてG・P・ピアソン、哲学者としてH・M・ランディスを推薦する。ピアソンと一緒に1888（明治21）9月再来日。ノックスは慶応義塾大学に1891年（明治24年）から一年間心理学の講義に出向する。1893（明治26）アメリカに帰国。ユニオン神学校、エール大学などで教える。1911年インド・中国などを旅行、1912年4月、肺炎で中国で客死。日本政府は勲三等瑞宝章を贈る。



創立会員の小坂かよさん(92)を悼む

当会創立メンバーの一人であり、永らく役員・理事を務め、北光社開拓団ゆかりの人でもあった小坂姉が、昨年12月24日召天されました。前夜祈禱会・葬儀式は縁の方々で執り行われました。当会から、ご遺族へ弔電を送らせていただきましたので、ここに報告いたします。

電 報



元気な頃の小坂さん

クリスマス季節になると、日本でもあちこちからヘンデルの「メサイア」が聞こえてきます。中でも第2部の合唱曲「ハレルヤ」コーラスは有名で、今では、各地の学校で卒業式に歌ったりもしています。今年も、クリスマス深夜、NHKがおよそ2時間半ほどの放送をしていました。

小坂かよさんは、書家として、聖書の中の言葉をしばしば様々な書体で書かれました。ご自身の生き方や、人々を励ます言葉などでした。旧約聖書の詩編から第23篇がお好きで、しばしば美しい書体のそれをいただきました。今年9月札幌での展示会には漢字一文字で「軛」という力強い書体が表示されました。終了後に「親しい方が写真を送ってくれました」と、はがきに一文字がありました。書体も知らされませんでした。なじみのない独特の形でありました。

「軛」は昔農作業で2頭の牛をつなぐ道具でした。ヨークともいいます。メ

サイアの中に引用される新約聖書『マタイによる福音書』の、キリストの言葉「わたしのもて来なさい」を示す箇所は次のとおりです。「疲れたもの、重荷を背負うものは誰でも私のもとに來なさい。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすればあなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(11章28節〜30節)

小坂さんの日常は常にキリスト教徒としての歩みでした。小坂さんの旧姓は「中田」といい、中田さんは、祖父中田米太郎さんの時代、1897年に北光社移民団として、四国高知から野付牛に移住した団体のリーダーの一人でした。ピアノン記念館二階展示室にある一枚のおおきな集合写真1910(明治43)年6月10日、宣教師ピアノン夫妻を迎えての記念写真に北光社関係者が見えます。米太郎さん夫妻も見えます。前列に着物を着た10歳くらいの少年が見えます。将来の小坂かよさんのお父さんになる坊やでした。

北見市が長らく管理していた「ピアノン館」が、だんだんに古びていくのが心配な田村牧師や北見教会員たちは、27年前から活動を始め、北見市に

改善を申し入れました。時間がたつぷりある高齢者一同は、しばしば市の担当者を予約なしで訪れ、たかさんの申し入れをくり返しました。小坂かよさんもその中のお一人でした。

やがて北見市は、ピアノン会に「維持管理に携わってください。」と許可されました。はじまりの時でした。多くを経て、ピアノン会はNPO法人ピアノン会となり、北見市も指定管理者として指定していただき、ピアノン記念館は23年前、第一期の北海道遺産に認可されました。

小坂さんは初期の苦勞から解放されて、以来ずっと運営会員としてピアノン会につながって来ました。天国での再会を祈念して、ひとときの別れいたします。(文案・顧問/吉田邦子) 2023年12月26日

NPO法人ピアノン会 理事長 中山一夫

【写真】北光社講義所にて(六月の北見路) I・G・ピアノン著より



祖父米太郎

父中田和雄

オホーツク勤医協 友の会 素敵な来館者たち!



12月16日土曜日、北見市常盤町にある医療法人オホーツク勤労者医療協会「友の会」16名がピアノン記念館を訪れました。

地元の団体が当館を訪れることが久しぶりでもあり、張り切った案内を務めました。地元の方々ではありましたが、半分くらいの方が、初めての訪問ということでした。存在は十分に知っているが、「いつでも行けると思い、今日になってしまいました」と。ピアノン宣教師夫妻のこの地方での各種の社会奉仕活動の説明に、「単なる宗教活動者ばかり思っていました。開拓者の精神的・社会的な拠り所としてここに集まっていたのですね」と、新しい発見に目を輝かせて観覧していました。

「ニュージーランドからの便り」第43回



ピアソン会顧問 グラハム・ハード氏

2023・12・24(土)

◆北見では、皆様お変わりなく、多分、ホワイト・クリスマスになるよう期待しているのではありませんか。

◆ここ、ファンガパラオア(北島・オークランドの北側、住居)は、どんよりした雲に覆われていますが、予報どおりに穏やかなクリスマスの日です。今日と明日は、ホブソングイル・ポイントで家族揃ってクリスマス会をします。甥のデイヴィッドが娘ルヴィとともにいるばるオーストラリアから来るので、皆が喜んでいきます。今年、ポフツカワ(*)の赤い花が特に美しいです。(＊樹の名前・大きく枝を張り、この時期に赤い花が満開を迎える。クリスマス・ツリーと呼ばれている。)

◆予定通りの良い出来でジャガイモを掘りましたが、まだ大半は土の中です。プラムは色づきはじめ、もう少しの日を要します。年明け早々ファンガイへ出かける予定ですが、そのプラムは、熟していることでしょう。

◆2023年は、日本で多くの



故郷の「北見農園」プラム

方々にお会いでき、素晴らしいことでした。温かいおもてなしに与り感謝いたします。北見の皆様、ご家族の皆様、どうぞ楽しいクリスマスをお過ごしください。2024年のお幸せをお祈りいたします。

グラハム・ハード

2024・1・12(金)

ファンガイからの挨拶

◆北見の皆様、良い新年をお迎えのことでしょう。

◆新年早々に、石川県での悲劇的な大震災と羽田での事故を知りました。空港の事故で、民間機の方々が生還できたことは奇跡のようでした。乗客とクルーの冷静な協力態勢の証しだと思いました。震災に遭遇された方々のすべては計り知れないことですが、長期に及ぶ多くの救援、被害からの復旧・再建がなりますように。

◆ここニュージーランドではいつもの夏の日々です。先週木曜日にファンガイ(北島・南部地方故郷。住居と3haあまりの草原。従兄弟ステイヴの放牧場に隣接。)へ来て、明日はファンガパラオアへ戻ります。このプラムは大した出来ではないがそれなりに、親しい人々への分配には良い具合。リングはたわわで、3月下旬の収穫が楽しみです。

◆先日、従兄弟のステイヴと一緒にレッド・ライオン・パブで、ファンガイ川やシテイ・ブリッジの景観を楽しみつつ昼食をしました。風景は、過ぎ去りし日々の記憶を呼び戻し、かつ、ローカル・コミュニティに想いを馳せるチャンスともなりました。フェイリング家畜市場に立ち寄りしましたが、牧場から来ている羊たちは思ったより良い値が付きまして、とは言え、

去年よりは安値でしたが。羊毛価格はとても低く、綿羊農家には厳しい時代です。

◆ご多幸を グラハム・ハード

ピアソン記念館英語版「エコバッグ」



昨年、ピアソン記念館「オリジナルエコバッグ」を製作しましたが、好評です。今回製作したエコバッグは、前回とは趣向を変え、Mサイズの36cm×37cm×11cmの大きさ。布地も厚め帆布のトートバッグです。片面にピアソン記念館のデザインを配置し、北見市指定文化財や北海道遺産を英語で表記、ピアソン記念館名も英語での表記です。このバッグは一部「ほっかいどう遺産WAOON」の助成を受けて製作しました。本年は、ピアソン氏の故郷エリザベス市と北見市の姉妹都市提携55周年になり、各種の記念行事を計画していますので、このエコバッグもエリザベス市への記念土産として使用できればと考えています。 頒布1000円

編集後記

新春早々、能登地方では大きな地震と津波により、多くの人々の犠牲と建物やインフラなどの多大な被害を出す結果となりました。また翌日には、羽田空港で飛行機事故により海保機の5人がお亡くなりになりました。

暗いニュースで新年を迎える結果となり、「新年おめでとう」という通年の挨拶を今年は禁句としています。

昨年暮の12月に、当会発足発起人の一人であり、初期役員を長く務められた小坂かよさんが召天なされました。ご冥福をお祈りいたします。

年明けの1月10日に、姉妹都市土佐の高知市から23名の訪問団が、当記念館を訪問されました。市議会・商工会を代表される方々でした。ピアソン夫妻と親交の深かった坂本直寛(坂本龍馬の甥)の故郷からの訪問団です。

今年度も残す期間は2カ月足らずとなりました。今年度の事業計画・予算措置など事務的に取り組まなければならない仕事も予定されています。年々仕事の負担を感じるようになり、早めに準備に入りたいと思っています。ご協力よろしくお願いたします。

(副理事長兼事務局長) 伊藤 悟

瞳ふあっしょん・瞳けあ

めがねのよっしー

代表 岩井 敏忠

〒090-0043 北海道北見市北3条西3丁目

携帯 .090-2693-1919 TEL.0157-57-3664

定休日/毎週木曜日・営業時間/10時~19時